

I. 文化的成熟

1. 車の乗り方

Aさんに質問をしたいと思います。Sさん夫婦が、友人夫婦を招待をして、Sさんの車で出かけることになったとします。運転しているのはSさんで、奥さんが車の外に出て、相手夫婦にどうぞ車に入ってくださいと招くわけです。その時の、相手夫婦とSさんの奥さんの車の乗り方で最もAさんのイメージにぴったりくるのはどんな乗り方か。

S	2
1	3

大文字のSは旦那さん。相手がお客さんでゲストのGにします。その奥さんgとします。Sさんの奥さんはsとします。で、助手席を1番。後ろの席2番。3番として。Sさんの奥さんとゲストの旦那とゲストの奥さんがどこに座るか、どこの席に座ったらAさんのイメージにぴったりするか言ってください。

A氏「まずゲストの旦那が1番の席。2番がかあちゃんです。3番がゲストの奥さんです」。これがAさんのイメージです。

A

S	s
G	g

次に、Bさんお願いします。同じ様に考えてください。それぞれの番号のところにさっきと同じように入れてください。B氏「1番が、妻のs。2番がゲスト

のG。3番がゲストの妻g」。代表的なパターンが2つ出たんですけども、これ以外の人いませんか。

B	S	G
	s	g

C氏「ゲストの妻であるgが1番。あとの2番と3番は、どちらがどちらでもいいです」。

C	S	G
	g	s

もの凄くおもしろいんです。山崎正和という、社会学とか政治学とかをやっている人がいますが、その人がある本の中でアメリカの人が言っているこういう車の乗り方を紹介しています。

その本によると、3番目のCが上流中産階級の車の乗り方だそうです。2番目のBが中産階級、1番目のAが低所得者層の車の乗り方だと言っているんです。それで、ヨーロッパだとかアメリカだとかつまり近代市民社会が成熟した社会では、夫婦間の社交とか女性の自立とかそういう物凄く深いバックボーンがあるから男女は対等平等で、夫婦で相手をもてなすと考えるとホストの旦那とゲストのおかみさんこの二人が隣同士になって話をする。外交官がやるパーティに夫婦で参加した場合は必ず奥さんは相手の旦那と喋ります。そういうもてなし方をしますし、もちろん夫婦が相手夫婦をもてなして、その場合は女性も自立して一人前の人間として相手の異性の男性を接待する。こういう考え方です。1番目のAは最も日本的です。今ここでアンケートのようなものを取って、手を挙げてもらえばほとんどの人がAになるわけです。旦那が二人前に座る、旦那同士で釣りの話をしたり競馬の話をしたり、まあ最初の話のきっかけは車の話です。こういう話をします。後ろのおかみさんたちは、それぞれ趣味の話をしたり子どもの話をしたりします。アメリカとかヨーロッパではこれがはっきりと所得層によって意識が決まっているということを言っているんです。それで、これは人間関係のことを言っ

ていますが、その社会の成熟度近代市民社会に行くと民主主義度とか成熟度とか豊かさ度によって人間関係が微妙に変わって来る。こういうことを具体的に示しているんです。そこから言うと日本は、実はG N Pとか所得は高いんだけど人間関係についての考え方とかもう少し広げて、文化の成熟度から見るとAなんです。一回これを試してみてください。みなさんの友人が、どういう車の乗り方をするのか、絶対Cはありません。日本人がCを取る場合には、異常な感覚です。スケベ根性がある場合です。でもアメリカ、ヨーロッパではごく自然にCを取るというのは、民主主義の成熟度、文化の成熟度または社交の成熟度を示していると考えられます。だから民主主義社会とか社交の歴史が日本とは100年ぐらいの差がある。そのうち日本も1番の座り方ががおかしくなって、2番3番と移っていくんではないかと考えられます。

それで、よく考えてみるとそれは日本のスポーツの状況についても同じことが言えるのではないかということです。

2. 「小錦」と「舞の海」の取り組みは「面白い」か

教育学部の一般教養の保健体育講義で、小錦と舞の海の取り組みのビデオを見せました。丁度1月場所の中日で天皇が見にきた日がありましたけれどもその時にこの二人の取り組みがあつて、なかなかおもしろい割合時間がかかった取り組みでした。この時は、舞の海が横から攻めて勝ったんですけども、そのビデオと1つ前の九州場所のビデオこの時は小錦が280kg以上の体格を利用して舞の海を力づくめで押し出したという2つの同じ取り組みを見せて、そこから授業を始めた訳です。

日本のプロの大相撲の場合には小錦280kg以上と舞の海100kgちょっとの人がごく当たり前のように対戦する。私たちも、時々そういう体重差が有りながらも舞の海が勝ちますからああこれはおもしろいなあとおもいます。私は、相撲で言うと智の花の大ファンで、ああいう小兵力士が大型力士を破るといふところが大相撲では大変おもしろいです。それにはいろんな理由があつて、土俵があつて試合が一本勝負で、とにかく外へ出るか、土俵に触るかをすれば負けである。ですから、ほかの格闘技にはない特殊な相撲という特殊な試合のルール、勝敗のつけ方のルールがあつて倍以上の体重差に関わりなく体重の少ない人が勝つことがあるとい

うこと。基本的には体重の重い人がいい訳ですが、それでも現行のルールでは小兵力士が勝つことがある。そのおもしろさがある。おもしろいと思う、私たち自身の文化的成熟度はどうなのかという問題の立て方です。

3番のような座席の座り方をするヨーロッパ人たち、アメリカ人たちはたぶん小錦と舞之海の取組をみたら、これはおかしいと思うはずなんです。こんな体重差のある人たちが同じレベルで闘うというのは本来、不公平である。平等ではないという前提があります。

ボクシングとレスリングはきっちり体重別になっています。これはみなさんが御存知のことです。ボクシングでいうとモスキート級からライトフライ級、フライ級、バンタム級、フェザー、ライト、スーパーヘビー級まであって、体重の軽い方はほぼ、左側の方は3kgきざみで、体重別になっている。ウェルター級以降は6kgきざみで体重別になっている。つまり、ボクシングの精神は軽い方でいうと3kg以上の体重差があったら、これはもう不平等であるという考え方なんです。3kg以上の体重差だと対等に闘う条件じゃないということです。重い方でも6kgを超えると平等ではない。だから、厳格に体重別になっている。つまりそういう平等についての考え方、平等意識を持っている。

レスリングは、48kgまでとか、52kg以下とか、57kg以下とか、62kg以下とかいうふうにはほぼ5kgきざみになります。重い方はもう少しきざみが大きくなりますけれど。レスリングでも5kg以上体重差があるとこれは不公平、不平等であるという前提があって、きっちり体重別になっている。

大相撲だけが、百数十kg体重差があってもごくごく当然のこととして受け入れている。その受け入れた中で、体重の少ない方が勝つということに喜びを感じているような美学とか美意識を日本人は持っている。一方では対等とか平等とかそういう感覚を持っている。柔よく剛を征すとか、そういうのを美意識として持っている。この違いが社会の進歩とか歴史の進歩からいったら順序づけることができるんじゃないか。こういうふうな見方もあるわけなんです。

ついでに相撲でみるとプロの相撲では百数十kgの体重差を平気のこととして受け入れていますけれど、アマチュアの相撲の場合は体重別をとっています。昨年の12月に行なわれた第4回アマチュア世界相撲選手権がありました。ここでは軽量級、中量級、重量級、無差別級というふうにランク分けされています。75kg以

下、100kg以下、100kgそれに無差別という確かそういうランク分けでしたけれど、25kgきざみでランク分けしている。日本はすごい。軽量級では優勝できない。軽量級ではモンゴルの選手が優勝している。中量級と重量級では日本が優勝したけれど、無差別級ではアメリカのヤーブロという身長が204センチ、体重が300kgもある人が重さを利用して、日本の学生横綱を破って優勝した。外国人も参加するようなアマチュアの世界相撲選手権ではこういう体重別を採っている。もちろん日本のアマチュア相撲も採っている。

しかし、採らないものもあります。これが世界のアマチュア相撲の現状が書いてあります。けれども、2008年の大阪が立候補しているオリンピックにSUMOUです。柔道がJUDOになったり、相撲がSUMOUとなって、正式種目になる可能性が高い。もしも、大阪でオリンピック開催が決まれば、これはソウルオリンピックで昔から朝鮮半島に伝わる武道として発展しているコテンドーというのがソウルオリンピックの正式種目になったように地元の特徴ある種目を採用するという例もありますから、もしも大阪でオリンピックの開催が決まれば、相撲がオリンピックの正式種目に入る可能性が高い。そのため2004年には公開協議として実施して1回トライアルをして、2008年には正式種目に入れようという心づもりである。

1992年に始まった世界相撲選手権とともに、国際相撲連盟が発足した。現在はアメリカ、イギリス、フランス初め64か国がもうすでに加盟している。競技人口は世界に3万といわれています。世界の相撲分布図というのがあって、昔から盛んなのはブラジル、アルゼンチン、パラグアイと10年以上も前から、日本人がそこで指導している。去年の10月にパリでヨーロッパ選手権も開かれている。実はあまり知られていませんが、相撲というのは体重別になっていて、開かれたスポーツというか、日本古来の文化から、世界に広がっていくようなスポーツへと変化しつつあります。そうすると、当然その影響を受けて日本のプロ相撲も、たぶん、そのうちに変化していくでしょう。ということになるわけです。

日本の相撲も最近、少し変わりつつあります、例えば優勝力士が表彰式の後、土俵サイドでインタビューを受けています。これは今までの日本の大相撲の中にはなかったことでして、少しずつマスコミの関係で日本の大相撲の中身も変わっていますし、貴の花対策で、部屋の枠を超えて、総当戦をしようという世論がで

てきて、それをやるかやらないかは別として検討せざるおえない。つまりそれまでもってきたしきたりが、少しずつ変わりつつあります。ですから、そのうち十両とか幕内とかいう区分ではなく、体重別の大相撲に変わることだってありうる。それは、もっとアマチュア相撲が発展して行って、それが取り囲むようにしてプロ相撲だって変わる可能性がある。アマチュア相撲の場合、国際相撲では、下着、パンツをつけることが認められている。カッコいいパンツをはいている人もいますけれど、いわゆる木綿のでかばんをはいた上にまわしをつける。そういう人もいます。セネガルの方は伸び縮みのきくパンツをはいています。この習慣だけは、どうも日本文化として受け入れることはできないみたいです。本当のまわしの下に、小さな下着みたいなものははいているのですけれど、それでもなお、直接まわしをつけるというのは、つまりおしりをそのまま人目に晒すというのは、どうも文化としてはなじまないみたいで、アマチュア相撲の国際大会ではこれは認められている。

それで、何を問題にしたいかという、日本の相撲はまだ、近代スポーツとはいえないのではないかと、なぜならばいろいろな例を挙げることができますが、実力ナンバー1のものがトップの座に座らない。これは近代合理主義からいうと大変不合理である。1番強い人がチャンピオンにならない。どういうことかという、いくら強くても、それ以外の条件で横綱になれないことがある。例えば小錦がそうでした。悔しくて負けて土俵を叩くというーそういうふうには悔しさを体の外側に表現するようなのは横綱としての品性に欠ける。という理由で小錦は残念ながら横綱審議会に推挙されませんでした。貴の花は、負けて土俵の下に降りて、口に含んだ水をぺっと吐いた。わかげのいたりだ。まだ横綱には早い。実力はだんとつ。十分に見合う星は挙げていた。つまりたんに勝ったとか負けたとかではないわけです。近代スポーツはたんに勝つか負けるかなんです。それだけが意味があるんですけど、日本のこの大相撲の場合はそうではないという要素が入っている。このことがやはり問題ではないか。

アマチュア相撲も含めて、柔道とか剣道は段位制を採っている。柔道とか剣道の実力トップは4、5、6段です。そういう人はまだペーパーで人格とか、品性のところでチェックがかって、人格、品性、人間性が優れた人が7、8、9段とになっていく。いつかお話をしたことがあるかもしれませんが、剣道で高段者の大

会で、京都大会というのがありまして、確か、毎年12月京都の7段以上いや8段以上、ちょっと忘れましたが、高段者たちで年は40、50、60、とか70くらいの人たち。9段とかなると超高齢ですが、そういう人の剣道が技術とともに人間性、人格、品性、品格まで剣士としてふさわしい。そういう人たちが集まってくる京都大会というのがあるんですけど、それまで、腰が曲がっている人が竹刀を持つと腰がピューと伸びる。両方試合場に入ってきますね。礼をして、シューとたってね。もうみたらヨロヨロじいさんです。それが竹刀を持つとピューと元気になって、顔はこのへんのたるみがピューと上へ上がってきます。シューと出てきて、竹刀を2、3回、ピ、ピ、ピ、と触るだけ、触ったら片一方が、と、と、とと下がって、まいりました。という。これがもっとも高度な技術であり、人格、品性が表われた剣道だと言われている。なぜならば、剣先を2、3回触っただけでどちらかの実力が高いか瞬時に判断している。見苦しい打ち合いは止めて、シューと下がってまいりました。これが真の剣道の世界だと言われている。

日本の武道はそういう世界を持っていて、ここのところが近代合理主義、近代スポーツを生み出した精神では理解できない。だからいいんだ。という説とそこを克服しないかぎり、作り変えないかぎり、スポーツとして発展しない。まだ、柔道とか剣道とか相撲とか近代スポーツ化していく途中だという2つの説にわかれます。私はもちろん後者の説です。そういう意味で、そういう成熟度、つまり日本人がイギリスとかアメリカとかヨーロッパとかのそういう社会意識から見るとおかしいこと、平等とか、対等とか、公平とかそれから正義という観点から見ると、小錦と舞之海との取組は最初からおかしいと思うような感覚を私たちが持つかどうか。ここのところに日本の社会の成熟度なり民主主義の定着度が私たちは表われていると思います。

そういう観点で今のスポーツ界の動向を眺めてみるとものすごくおもしろい現象があります。文化を変えていく積極的な現象があります。

3. 変わりつつあるサッカー界

(1) 外国人監督の隆盛

Jリーグの監督は半分が外国人監督です。成果を挙げています。外国人が監督として指導しているということは、直接的にはサッカーの技術とか作戦とか戦略、

戦術の指導をしていくわけですが、その人自身が例えばグランパスエイトの監督はフランス人ということですが、フランス人が持っている人格、品性。フランス人が持っている社会の成熟度を背景にした物の考え方に裏打ちされた技術とか作戦、戦術、教えがあります。つまり、文化が伝達されるわけです。つまり、技術とか作戦、戦術だけではなく、そうするとこれは高校野球の監督とJリーグの監督を比較するといかにそこでやっているプレイヤーの質が違いかおわかりになると思います。Jリーグはサッカーの優秀な監督を外国から招くことにより、これまで日本にないようなスポーツの世界を実は作りつつある。対照的なのはプロ野球でバレンタインが首になりました。せっかく最下位のチームを2位までに引き上げたのに。プロ野球の世界は残念ながら、バレンタインの実力をちゃんと認めなかった。もちろん中でいろいろと軋轢があったようですが、ナンバーというスポーツの雑誌に詳しく双方の意見が載っていましたけれど。ただ私は外国人監督としてのバレンタインはものすごく日本にとけ込みつつも本来のベースボールの楽しさを実現しようと努力して、ある程度実現した。という意味では、Jリーグの監督よりも私は功績が高いと私は思っています。日本のプロ野球は彼を異質分子として排除してしまいました。これはサッカー界と大違いです。

(2) 高校サッカーの変貌

高校サッカーも変わりつつあります。みなさんはあまり御存知ないかもしれませんが、テレビをよーく見ている人は、今年同点で引き分け優勝をした一方の静岡学園というチームがあります。これはサッカーに力を入れています。私立の高校ですが、そこのベンチに外国人が座っている。トレーナーとして外国からの専門の知識とか、技術とか持ったトレーナーをよんで、そのトレーナーが静岡学園のチームを指導しているんです。日本の高校生のチームです。ベンチの中に監督とか部長とか同時に外国人が座っている。いいと思います。和歌山に初芝橋本高校があります。この高校も私立高校です。ここのコーチは韓国人です。コーチはトレーナーより格が高い。それで、韓国流の指導をしています。というふうに日本の高校の中でも、サッカーについては外国人トップの知識とかを持った、また方法とか持った、外国人が入りつつあります。こうやって日本のスポーツ界は大きく動きつつある。まあ、そういう時期に来ていると考えてよいの

かもしれません。

私たち体育同志会の委員長早川武彦さん、この人は一橋大学の先生ですが、今のスポーツはする、見るスポーツである。こういう捉え方が大事だと言われます。それまでの日本のスポーツはスポーツと言えはするスポーツだと言われていたけれど、それと同時にもう1つ大きな柱は見るスポーツというのは現前としてあって、両方しっかり見ておかないと、今のスポーツ界はよくわからないふうに言われています。つまり、プレーする側の私たちの教養とか学力とか、を言われると同時に見る側の私たちの教養とか学力を問われる。

4. 「する」「みる」スポーツ

私たち体育同志会の委員長早川武彦さん、この人は一橋大学の先生ですが、今のスポーツはする、見るスポーツである。こういう捉え方が大事だと言われます。それまでの日本のスポーツはスポーツと言えはするスポーツだと言われていたけれど、それと同時にもう1つ大きな柱は見るスポーツというのは現前としてあって、両方しっかり見ておかないと、今のスポーツ界はよくわからないふうに言われています。つまり、プレーする側の私たちの教養とか学力とか、を言われると同時に見る側の私たちの教養とか学力を問われる。

5. スポーツの国民的教養の水準と教師の「学力」

ファルカン監督について、ファルカン監督が指導したサッカーの試合をどう鑑賞するか、バレンタイン監督の指導している野球の試合をどう鑑賞するか。そういう鑑賞力が問われている。さすが優秀な監督が指導した場合は、いいプレーが出ると見るか、勝った負けただけで、喜ぶか、鑑賞の質が問われていると思います。

日本のスポーツで鑑賞の質が最も低いのはバレーボールです。男女を問わず、典型です。相手チームのいいプレーには拍手一つしない。日本チームとか自分のひいきするチームには拍手を送ったり、がんばれとかフラッシュがたかれるけれども、国際試で相手のキューバがいいプレーをしたて、ブーイングが起こるぐらいです。この鑑賞レベルの低さは恥ずかしいぐらいです。18~9の若い女の子だけじゃなくて、35、6、7、8とか40ぐらいの主婦まで応援に来るんです。最近ちよっ

と主婦の層が下火になってきているそうですが、このレベルの質が低いので、観る教養が問題だと思う。

逆に今は、テレビがスポーツを変えるという時代ですから、日本のスポーツの未来像を描くときには私たちが国民としてのスポーツをどんなふうに見賞するか、鑑賞をとおしてスポーツをどう変えていくかという視点が必要だと思います。

学校の教師はそのことを子どもたちに教えるあり伝えたりする任務があるわけですから、実は教師の「する・観るスポーツ」についての学力が問われる。教師自身のスポーツ文化についての文化的成熟度が問われる時代に来ているし、21世紀は、まちがいなくそのことが本命になると考えます。そこまでに行き着くまで、体育同志会はどういうふうにしてきたかということをお話しします。

Ⅱ. 文化的把握

1. 同志会は何を実践・研究してきたか

－実践研究テーマの深化と発展－

(1) 教材研究の時代から運動文化論の確立へ

体育同志会は何を実践研究してきたかということで、1986年から94年のほぼ10年間ずっと見ていくと、86年群馬大会（夏の全国大会ですが）では「人権と平和を守り、すべての子どもを生き生きとした運動文化の主人公に育てよう」

87年神戸では、「平和と民主主義を貫き、みんなができる分かる、みんなが主人公の体育スポーツ実践と健康教育を作り出すこと」この二つの大会は、「運動文化の主人公」とか「みんなが主人公の体育スポーツ実践」とか「主人公」という言葉をスローガンの中に使っていました。

88年の山梨大会はバイクの事故で入院して参加できませんでしたが。89年京都大会「すべての子どもにスポーツの感動と生きる力」というスローガンです。それ以降「スポーツの感動と生きる力」とか「スポーツの感動」とかそういう言葉がずっと続いています。85年以前はどうだったかというと、「スポーツの権利主体にふさわしい学力」と難しい言葉を使っている。「スポーツ権」とか「権利主体」とかいう言葉を使って大会スローガンを作っていたことが多いんですけども、86年でやさしく言い換えて「主人公」という言い方をしています。ところが、89年以降は「スポーツの感動と生きる力」つまり、権利主体にふさわしい学力や

教養のことを「生きる力」という言い方に変えているわけです。スポーツをやること、学ぶことによって感動し、それを自ら未来を切り拓いて生きる力に変えていく。

(2) 「体育実践の民主化・科学化」

ざっと流れを見ていくと、86年それ以前はどうだったかということ、教材研究の時代から運動文化論という一つの主張を確立する時代がありました。それまで、具体的な教材研究の時代から、トータルに体育科教育の全体像、運動文化論という言い方で確立していく時期が、60年代の中頃までがそうでした。そして、体育実践を民主的なもの科学的なものにしよう、それから、みんながうまくなるような技術指導の系統をはっきりさせよう。

この時に、熊本とか九州とか多くの成果を上げている「ドル平」とかの水泳指導の系統的な指導方法が生まれたわけです。マット運動とか球技とか陸上運動とか、さまざまな技術指導の系統性研究が進みました。

(3) 「運動文化の主体者形成」「スポーツの主人公」「スポーツ文化のリレーランナー」

その次は、運動文化の主体形成とかスポーツの主人公であるとかスポーツのリレーランナーという言い方をして、そして、「スポーツの感動と生きる力」という言い方におさまってきているわけですが、私が思うに「スポーツの感動と生きる力」というスローガンを掲げた89年の京都大会以降、ある意味では、同志会の停滞現象が始まった。また民間教育運動の停滞現象が始まった。

(4) 「スポーツの感動と生きる力」

それは、文部省とか教育委員会とかの行政サイドの力が強くなって拘束力が強くなって、教師が自前で自分の実践を切り拓いていくということが、85年の後半からひどくなったことの表われでもある。「感動と生きる力」であるとか「主人公」のイメージであるとか、ものすごくやせ細ってきている。

2. 「主人公」のイメージ、「生きる力」のイメージ

具体的にはどんなことかというところ、「生きる力」とかいうときに、深い意味で、スポーツ文化を作り変えていく能力をもった子どもという捉えかたではなくて、生きる力を「子どもが生き生きしている」「生き生きと活動している」もちろん、今言われている「関心・意欲・態度」のレベルの「生き生き」とは質が違うんですけども、子どもがグループ学習の中で生き生きと話し合っていて、積極的に活動しているというふうなイメージで「生きる力」を捉えてしまうような傾向が出てきた。授業の中だけで生きる力を考え、全体として子どもの中に未来を切り拓く力みたいなものがどう築かれていくのかという発想が、希薄になってきた時代です。

3. 授業論としての「主人公」からの脱却

最初に「文化的成熟」と申したのに関係しますが、今あるスポーツを変革したり、創り変えたりする主人公にふさわしい力を授業の中でどうつけるかという意味で、「スポーツの感動と生きる力」というような言い方は、大会のスローガンから少しはずして、別の言い方の方がいいのではないかと思う。阿蘇大会がもうすでにスローガンを作って宣伝していますが、ぜひとも中味はそういう精神をこめなおしてほしい、と私は考えています。

4. 「文化を変革する」「文化を作り替える」主人公

文化を創り変えるというのは、もちろん体育の場合にはスポーツの技術を獲得して、うまくなることとかできることが重要な柱になりますが、それはあくまで体育で教えるべき中味の一部であって、それに加えてスポーツというのは、相撲が示していますように、歴史的社会的な文化ですから、当然21世紀には、今とは違う、新しい文化も生まれてくるわけであって、そんなふうには創り変える力を持った主人公を作ることが大事ではないか。文化の受け手ではなく文化の担い手であると同時に創り手であるような子どもを僕らがどう構想するか。

ただし、ここにいるそれぞれの人間がそれをどう描くかは、一人一人のイメージはみなズレている。何故ならばそれは今あるスポーツの捉え方、スポーツ文化の成熟度についてそれぞれがどうなのかということに、教師自身の教養とか学力に規定されますから、逆に言えば、私たち自身スポーツの未来像をどう描くかと

いう勉強に取り組まないかぎり、今のままでは21世紀の未来像はなかなか描けないと思います。

Ⅲ. 文化的教科

1. 教科論の発達

話を授業のことに戻しますけども、学校の中にはたくさんの教科がありますけども、その教科自体も歴史的に見ると性格を大きく変えてきました。梅根悟という有名な教育学者の説では、教科については三つの考え方があるということで、レジメにあげています。

実用的教科、政治的教科、それから文化的教科という考え方。それぞれの教科にこの三つの教科の考え方が混在している。

(1) 実用的教科観

実用的教科というのは、生活の役に立つという発想で教科を考える。最も原始的なのは、「読み・書き・算盤」っていうやつですね。体育でも、健康のための体力づくりというふうな言い方をすると、日常生活に役に立つという意味で実用的。体育の中での実用的教科観、今でも存在します。

(2) 政治的教科観

二つ目の政治的な教科観というのは、政治的とか軍事的とかの目的のために教科を使う。戦前の日本の歴史教育は、この政治的教科観典型でした。「天皇陛下万歳」を教えるために歴史学の成果を無視して、古事記から始まる歴史を教えた。これは、科学を無視して、政治的な目的のために教科を利用した。戦前の体育は、実用的な教科であると同時に、政治的軍事的な目的も同時に担わされました。戦前生まれの人、ここではA先生以外はいないと思いますが、そうですね。ざっと見渡したところ。私は1944年ですから、まだ防空壕の中にいましたから知りません。

(3) 文化的教科観

文化的な教科はどう扱ってるかというと、戦前では、美術教育、綴り方教育、

音楽教育だとかは、大正自由教育の時代に芽生えがありました。実用とか政治的とかでもなく、純粋にその文化固有の価値、その世界の、当時の言葉で言うと、子どもを「小さな芸術家」に育てる。子どもが絵を描くことは、直接の生活の実用目的ではない。それは、芸術のために絵を描く。芸術のために歌を歌う。そういう教科の考え方。これは、大正自由教育のときに生まれました。体育もまた、生活の直接の必要性のためでなくて、人間自体を豊かにするための教科として位置付ける。そこから生まれてくる教科観が文化的教科観です。梅根悟によりますと、「教科」というのは、実用的から政治的・文化的という三つを内側に含むけれども、大きな流れは、やはりどの教科も文化的教養的な教科観に発展しなければならない。つまり、実用的とか政治的教科観から抜け出て、より一層人間生活を豊かにするという教科観に立つ必要があると言っている。私たち体育同志会も基本的な理念はこの教科観に立っています。

「運動文化論」つまり文化としてのスポーツを丸ごと何かの手段として使うのではなくて、スポーツ本来の持つ楽しさ、文化そのものを発展させるというただ味わうだけでなく、文化の継承とか発展の主人公という言い方を私たちはしていますけども、そういう力を教える、つまり文化としてのスポーツ論に立つ教科観に立っていますから、梅田悟の言い方でいうと文化的教科観に非常に近いと考えています。

2. 教科の再編と新教科の出現（次の学習指導要領＝7教科、1領域）

レジメの右上いきますけども、そういう時代なんですけども、残念ながら学校の中にある体育というのは風前の灯火に近い。

現在指導要領の改訂の準備作業が進んでいますけども、土曜日がなくなりますから全体として時間数を削減しなければならない。そのときにやり方が二つあって、一つはそれぞれの教科の時間数を減らしていく。体育を週3時間あったのを2時間にするというやり方。もう一つは周辺にある大事な教科以外のところは合科して新しい教科にして統合整理する。子どもの数が減ったら、学校を統廃合するというのと同じ論理です。

いろいろな情報がありますけども、小学校の指導要領で準備されている基本構想は、7教科1領域構想と言われています。これについては国立大学の附属小学校

ですすでに実験的な取り組みが終了していて、部分的な修正はあるかもしれませんが、これでいこうと実験的な実践で答えが出ていると言われていています。基本的には国語と算数と体育が従来型で生き残る。つまりこれは「読み、書き、算盤」と「健康体力」です。

体育に担わされているのは健康と体力に加えて道徳教育。だから小学校では大事な教科として残る。スポーツや文化としてではありません。

実はこういう残り方は戦前の体育の姿、とりわけ1941年の国民学校令が採用された時の体錬科体育という残り方と大変よく似ている。国民学校令の小学校令は5つの教科に整理統合されて、そのうちの一つに体育、体錬科体育、体錬科体操でした。けれどもそれは健康とか体力と同時に当時の戦争準備、戦争突入のためのモラルを作ることが重要な役目でした。

こういう形で国語、算数、体育は残る。残りの教科は全部整理統合されて、現在もあります生活科、それから表現科、人間科、環境科。この科目の名前は少し変わるかもしれませんが、大枠はこんな新しい教科が生まれてくる。体育のうちで表現に属するもの、ダンスとかは表現科の方に移ります。健康に関わるものは生活科の方へ移ります。体育の方では運動が、つまりスポーツすることだけが残る。

そして特別活動という一つの領域が残って7教科1領域。小学校では多分こういう形で落ち着くだろうと予想されています。

中、高ではまちがいなく選択制が出てくる。高校ではひょっとすると1年生が教科選択。芸術領域の中で美術をとるか音楽をとるか書道をとるかということで、芸術全体が必修なんだけれども、どれを取るかは子供が選択出来る。そのグループに入れられて芸術と体育と一緒にして選択教科。つまり必修教科からはずれるということも試みの案としてはすでに検討されています。ただし、もしもそうなるのであれば、現在いる高校体育の先生は身の置どころがありませんから、これはそういう案が発表されたら、体育同志会は声明を出すかどうかは分かりませんが、まちがいなく高等学校体育連盟は、身分保障とか「高校の体育の先生はどうするんや」ということとからんで、これらは何らかの形で動きがあるはず。

先ほどいった案は、いくつかの案の一つですけども、そういう形で高校には必修からはずすということは、大学の体育は今すでにそういう形になっていますか

ら、それはまちがいなく高校までおりてくると。中学校はまちがいなく今より以上に体育の授業の中での種目選択が大幅に増えてくることが予想されます。

3. 教科としての体育の危機

以上のような形で今、体育の授業、教科としての体育がものすごく危ない。流動的ではありますが、まちがいなく豊かに増えていくという方向ではありません。それは、日本だけかということ実は先進資本主義国共通のことです。そこに書いてある英文これはバート・クルップというオランダの体育を勉強している人ですが、この人が、「アイデンティティ・クライシス・オブジカル・エジュケーション」と書いてあります。アイデンティティ=存在価値です。クライシス=危機的な状況、体育の存在が危機的な状況にあるという論文を書いています。存在が危なくなってきた。その下のサブタイトルが、シェークスピアの有名な言葉に掛けたもので「To teach or not teach. That is a question」、意味は「教えるべきか、教えざるべきか、それが問題だ」です。つまり学校教育の中でヨーロッパでも体育の存在価値が問題になってきている。

クルップの論文の冒頭のところに、地域のスポーツクラブの話が出てきます。子どもが学校の外でもスポーツしていると。それと比べて、学校の中でもスポーツしているというだけで、体育の存在価値があるのかと。そういう問いかけですね。これは私たち体育同志会が70年初めから自問自答してきたことともものすごくよく似ている。私たちの方が10年早い。別にこのグループの論文を読んだから、今同志会が教科内容の研究を行ったわけではありません。私たちの方が早いです。自信をもって言えます。

何故私たちの方が早いかというと、それだけ日本置かれている状況が厳しいこともありますが、それはそれとして置いてといて、先進資本主義国、ヨーロッパ、アメリカ等の問題意識とかなり似ている。これは大きな流れでいうと政府の予算削減を少なくしていく、予算の支出を少なくしていく、小さな政府論であるとか、公教育にできるだけお金をかけないようにしていくという資本主義社会の末期的症状が背景にあると言えるかもしれません。公教育にできるだけお金をかけないで、民間に移していくという先進資本主義国に共通の大きな流れがあって、学校教育の中で不要だと思われるものは、どんどんカットしていくという大

きなそれぞれの国に共通する政治的な政策、共通点がある。それが、クラブというオランダの学者が指摘しているようなヨーロッパの状況でもあるし、アメリカの状況でもあるし、日本の状況もそうだという。これは共通すると思います。そういう状況の中で、では一体私たちはどういう体育の授業を目指すのかというところで、結論に入ります。

IV. 文化的認識

1. オリンピック運動100年、戦後50年

もうご存じのように、今年のほとんど新聞の元旦号はオリンピック100年の特集をしていました。綴じ込みのほうで今年はオリンピック運動100年。戦後51年で、日本の学校教育とか学校体育とかスポーツは少なくともこの戦後50年の中で大きく変わってきました。

もちろん、この中には、20代の人でも大勢いるようすし、20代の方は1970年代に入ってから生まれた人が多いですから、今からお話するのはそれ以前の話もありますから、生まれていない時代の話になることも多いんですけども、日本のスポーツというのは、明治に外国からスポーツが入って以来、ずっと学校が中心でした。学校がスポーツについて全てを請け負っていた時代が長く続いたわけです。戦前はほとんどそれだけでした。

2. 学校と教科の役割

(1) 学校がすべてを請け負っていた時代

たとえば、有名な早慶戦とか東京六大学も早稲田大学という学校で、慶応大学という学校の中での教科外活動、つまり、クラブ活動です。これが、学校の枠の中でのスポーツがマスコミによって広まっていった。

もちろん、子どもたちは、スポーツを授業の中で行い、学校以外にはスポーツする場所はありませんでした。こういう時代が長く続いて日本の戦後も1960年代の初めぐらいまでは、日本の子どもたちは学校の外では基本的にはスポーツすることはなかった。つまり、スポーツとか運動については、学校が全てをかかえていた時代が長く続いたんですね。私たちの発想の中に子どものスポーツについては、学校でなんとか面倒をみると、または、学校がその中心舞台である

という意識がなかなか抜けません。それでいいのかどうかという問題が出てきます。

(2)学校と学校の外の協力、共同の時代

そこで、それを打ち破ろうとする努力または、そのことを指摘しているのは、Jリーグのコメントでたくさんあります。例えば、玉木という人は、「学校が抱え込んでいたスポーツを学校から抜き出す力をJリーグというかサッカーは持っている」とコメントしていますが、子どもの状況を見ると、1960年代からの学校が全てを抱え込んでいた時代から、今90年代に入って子どもの現実を見ると、子どもは学校の外でスポーツをしている一方、かたや学校の中でもしている。子どもたちの生活が二つに分かれている。

そうすると、私たちは当然、学校の外で子どもがどんなスポーツをしているか、スポーツ活動をしているか、何を学んでいるか、どんな問題点があるかということを一方で自覚しながら、それとの関係で、学校の中で何を教えるのかということを考えざるを得ない。学校の中で丸ごと100%抱え込むのは不適當になってきている時代になっていると思います。そうすると、授業から少しはずれますけども、私たちの実践課題で授業を新しく組み合わせるといふことと同時に、学校の外の子どものスポーツ活動を視野に入れて、例えば、その指導者なり中心的な人達との協力、または、そういう運動との協力関係、共同関係を作ることが必要ではないか。

例えば、社会科教育であるとか生活指導の人達だとかは、もうすでにそういうことを言い出しています。どういうことかということ、公民館運動の指導者との連携とか図書館運動の指導者との連携とか、九州は盛んかどうか分かりませんが、和歌山はだいぶ盛んなんですが、「親子劇場」、いい演劇とかを観る親子劇場というのがありますけども、そういうところで中心的に活動している、これは子どもの文化活動ですね。学校の外での文化活動の指導者たちと学校との連携ということ視野に入れられないかぎり、学校の中での文化活動の指導とかいうことに十分な効果を上げることができない。そういう時代に来ているんだと思います。

例えば、滋賀県では、1年間で30数回、年間の計画ができていまして、30数回大きなプログラムは、1000名ぐらいのホールを借りきって、小さな公民館20名ぐら

いの催しになると、だいたい月に3回ずつぐらい、琵琶湖一周で大津から右回りで上がって行って、4月の初めに大津、その次に彦根とか上がって行って、12月になったらまた大津に戻ってくるというプログラムを持って、1年間で琵琶湖1周回ろうという親子劇場ですから、演劇だけじゃなくて、音楽とか様々な文化活動をしているんです。子どもがニュース作りの活動に参加したり、子どもがチケットを販売したり子どもがプログラムを作ったりという活動を全部巻き込んでやっています。総合的な文化活動としてやっています。

これは、学校の中でやっている文化活動とは質が違う高さで、学校でやっている文化活動なんか問題にならないぐらいの広い視野と深さを持って、そこでは活動が取り組まれていて、そこで、実は子どもが育ってるわけですね。そのことを抜きにして、学校の中での文化活動を考えることはできないという時代にすでに来ている。

だから当然、どんな子どもに育てるかについては、例えば、地域の社会体育の指導者と連携をとるとか、民間のスイミングスクールの指導者と話をして、それは敵対関係ではなく、協力・協同の関係を作りながらやっていく。一見商売敵なんだけども、現実には自分のクラスの子どもがそのスイミングスクールに行っている訳だから、学校の外の専門家、活動家、運動家との協力・協同関係ということをやらないかぎり、私たちはいつまでも学校の中に閉じ籠って物事を考えていたのでは成果は上がらないのではないかと思います。これが、学校と教科の役割を考える大事な問題である。

(3) 「技術と集団」から「スポーツ文化の発展論」へ

第二の問題は、これは、私たち体育同志会の研究実践史と関わるんですが、わたしたちは、ヒューマニズムとか人権意識あふれた団体ですから、これは、体育同志会の各支部の例会であるとか、全国大会に参加されたらすぐ分かることです。みんな大変人柄がいい。私はその典型的な人間だと自負しているのですが。

ヒューマニストで、人権意識に溢れている。もちろんそれは、行政がヒューマニズムと人権意識に溢れていないから、それに対抗する運動としての私たちは（同志会）、その非人間的なものとか、下手な子を切り捨てるだとか、うまい子だけをちやほやすることではなくて、どんな子どもにも確実にきっちりした学力

をつけるという立場から、また単に感性としてヒューマニズムに溢れているだけじゃなくて、職業として、プロとして、ヒューマニズムと人権意識に溢れていると思うんです。

しかし、その私たちでさえ、（語弊があるかもしれませんが）1950年代から1970年代ぐらいまでは、体育の授業の中で、下手な子とかできない子をどうするかについては（そこでは、技術と集団と書いていますが）、集団づくりで、下手な子はいるけども、この子を切り捨てないで、皆でうまくしてやろうではないか、というようなことを授業の中心テーマにしてきました。

「みんなで下手なよしあき君を（よしあき君というのは私ですが）みんなできうまくしてあげよう」とか、みんなうまくしてあげるために、グループを作って、グループの中での学び合い教え合いを組織して（単にお恵みで、うまい子・できる子のお恵みで感覚としてのヒューマニズムで、下手な子を手助けするのではなくて）下手な子を教えることによって自分の技術についての分かり方が深まっていく。うまい子も下手な子と関わることによって自分のでき方が変わってくる。

そのことを私たちは実践の積み重ねの中で見つけ出したから、単にお恵みとか仲良しとか同情とか協力のレベルで下手な子とかできない子を大切にしてい

「みんながんばりましょう」と励まし合いの集団で終わらない。つまり、うまい子と下手な子が関わることによってこそ、体育で教えるべき中身より効果的に効率的に子どもの中に定着していく。技術のしくみがより一層分かたりする。

これは他教科でいうと間違った答をみんなで確かめることによって算数の法則性がより一層分かってくるということです。間違った答、自分と違ったでき方、出来映えと絡み合うことによって、より一層、体育でいうと自分の出来映えとか分かり方が洗練されてくるということを、私たちは、60年代、70年代の研究で見つけました。それは、「技術」とか「集団」とか「技術指導と集団づくりの関係」とか言われてきた時代です。

(4) 技術的認識と文化的認識

しかし、それは、体育で教えようとしている中身が技術だけであった時代だったら、それでいいんです。言葉を変えると「みんなをできるようにする」とか「みんなできようになるようになる」というようなことを実現する。それを授業の

大きな柱にしていた時代だったら私たちの取り組みはそれでもよかったわけです。

今はそうではない。つまり技能の習熟はスイミングスクールとかもやってるわけです。「アイデンティティ・クライシス」学校の外で子どもは授業よりもいっそう速いテンポでサッカーがうまくなっています。そういう時代の中で体育はいったい何を教える教科かと問われた時に、体育は相変わらず「みんながうまくなること、できるようにすること」を授業の唯一の目標として掲げている。へたな子を大切にしながらみんなで高め合っていこうということだけでいいのかという問題意識が生まれるわけです。最近ではそういう「技術」と「集団」から少し幅を超えて、「へたな子が生まれてくるのはどういうことなんだ」とか、「それはスポーツの文化的な特徴から見てどういうことなのか」ということをしっかり子どもに教える必要があるのではないかと。できる子とできない子を人間関係のレベルで協調させていく、高め合っていく、励まし合っていく。そのことも勿論重要であり、体育の相変わらず中核部分である（技能習熟・技術認識）が、それに加えて「何故下手がうまれるのか」「スポーツの中の競争とか勝敗とかいうのは、いったいどういうものの考え方を持っているものなのか」という文化的認識をも子どもに身に付かせることを授業の目標にしなければならない。

スポーツとは何か、スポーツにおける競争とは何か、勝敗とは何か、スポーツとは何故勝ち負けとか順位を争うのか、そのことは人間にとってどんな意味があるのか、それぞれのスポーツでそれはどんな構造として表れているのか、ルールはどうなっているのかということをお話しておくことが一方では必要ではないか。

単にうまい子とへたな子の人間関係のところだけで解決できない。また、もう少し風呂敷を広げて21世紀を支える子供たちにふさわしい教養や学力ということを考えれば、技術的認識だけでは足りないのではないかとという私なりの問題意識があるということです。

3. 「対象世界の客観的認識」

静岡大学の山崎準二さんという人。この人は教育学会とか教育方法学会で活躍されてる人で、教科とは何か、教科論について最近目覚ましい成果を上げてる方ですけどもこんなことを言ってます。

「対象世界の客観的認識を欠落させ、ないしは曖昧にしたままでの学習では人

格と結び付いていく知（思想知）は形成されない。そこには人格の有り様と切り離された知（技術知）を獲得し、その知を操る人格を道徳という別の会話からつり込もうという営みが残るだけだ」

(1) 「関心、態度、意欲」

「自ら学ぶ力」「めあて学習」の問題点

現在の「関心、意欲、態度」であるとか、小学校の「めあて学習」であるとかいうのは、この山崎さんが警告している対象に対する客観的認識を欠落させている。関心、意欲、態度という人格に関わる部分を、道徳として教える。対象世界に客観的に、技術についての認識を、スポーツとしての認識を科学とか文化とか法則とか概念とか技術としてしっかり教えるのではなくて、支援という形をとって、子供の中が生き生きとか、関心とか、態度とか、分かっているか、分かっていけばいいとか。そうすると子供は跳び箱が跳べなくても、マットができなくても、「今日の体育どうだった？」と言ったら、関心、意欲、態度で「楽しかった」というふうな子供が出現する。

戦前の「天皇陛下万歳」の教育はその典型でした。レジメに疎開児童の作文を引用しました。「私の体は自分の体であって自分の体ではありません。尊い皇国の体です。一度日本の国民として生まれたからには、陛下に忠義を尽くして奉ってからでなくては死ねないからだ。こう考えると、大切にもっと遅くりっぱなしにしないでやらぬという考えが心から沸き起こる。これからの日本の小国民はますます体を鍛えることに精を出し、西洋人よりももっと優れた体を作りりっぱな皇国の体にしたい」

関心、意欲、態度からいうとこの子は百点ですね。天皇陛下のためにりっぱな体を作りたいと言う意欲に溢れているわけですね。

今の所からずっととんで、「みんな裸になった。今度は突き殺すおけいこだ。とてもおもしろかった。疲れたが一人でも多くの敵を殺そうと思った」

これは同じく疎開児童の作文で藁人形を突く銃剣術の練習のことを言っているですね。関心、意欲、態度からからいうと大変意欲に溢れた規律ある行動を取ったわけですから、二重丸、三重丸です。だけど問題は対象世界の客観的認識が欠けている。ですから「自ら学ぶ力」というのは、自ら学ぶ力そのものが存在する

のではなくて、客観世界対象認識、科学と文化という人間の体の外にある客観世界、それを体の内に取り込むことによって、子供の内に学ぶことの意欲とか関心とかが生まれてくるわけで、それと対応関係にある。今私たちがスポーツの権利主体とかスポーツ文化の主人公とか言うときには、客観世界、対象物としてスポーツ文化がある。それは歴史的社会的な存在として100～150年の歴史があって、まちがいなくむこう100年ぐらいはまだスポーツ文化は生き残るでしょう。ひょっとしていくつかの種目は、相撲は死滅するかもしれません。サッカーも形を変えてしまうかもしれません。ラグビーはもう古いからなくなるかもしれない。ラグビーファンの皆さんごめんなさい。ハングライダーとかいわゆるニュースポーツは後20年ぐらいは持つかもしれないけど、あまりにもおもしろくない。ただやるだけだから、飛んでるだけだから。その後はまたシスティマチックな球技とかがもてはやされるかもしれない。でもそうやって変わりつつも向こう100年ぐらいは続くでしょう。

そういう継承発展を押し進めたり、チェックかけたりする力を持った子どもとということから言うと、今あるスポーツについての客観的認識、これは技術的認識に加えて文化的認識を体育の授業の中できっちり教える必要があると思う。

(2) 「達成」と「形成」の区別

達成と形成の区別というところにとどめます。これも自ら学ぶ力を批判したり、めあて学習の中でよく出てくることです。内海和雄さんはこのように書いています。

「授業とは教師や子どもたちの集団の中で教材、科学や文化を授業用に編成しなおしたものを学ぶ過程で、子どもたちは思考し判断し知識を得、理解します。つまり達成する。そしてこの過程で学習への関心、意欲が湧き、学習への態度がより広く深くつまり形成される」

科学や文化を学ぶこと、これが達成で、その学ぶ過程で例えば人格が作られる。このことを形成という。このことの区別をしっかりとる必要がある。体育の授業ではこの区別が意図的にまた無意図的に区別しない歴史がものすごく長かった。これを改めてきっちり私たちは区別する必要があると思います。

4. 「教えたいたいこと」「伝えたいこと」がある（未収録）

5. 子ども、国民の「必要性」の変化と発展（未収録）

6. 新しい体育の教育課程のイメージ

では私は「21世紀の体育のゆくえ」というタイトルに対してどのような体育のイメージを持っているか。これは、「楽しい体育」の96年3月号・まもなく出る号に書いた中の一部分ですけれども・体育の授業と教科外教育があって、学校の中での教科体育というのは授業と授業以外の体育がある。教科外体育というのはクラブとか部活とかスポーツ行事とか子どもたちの放課後の自主的な活動でこの両面がある。今日の話の強調点から言うと、学校の中の教科としての体育の授業と教科の外にある教科外体育、この二つは学校の中の教育です。それとともに学校の外のスポーツ教育、これは民間とか公共を問わずその全体で見ていく必要がある。その内の半分、学校の中でのことをこれから言っていきます。この問題を常に視野に入れて授業のことを見ていく必要がある。

授業のほうはどうかというと私は基本的には次の四つにこれからの授業を分けたい。大きく分ければ二つですけれども、その一つはグラウンドや体育館で行う授業。従来の体育のイメージだと思ってください。グラウンドへ出てサッカーやドッジボールをする。体育館でマット運動やバスケットボールをする。もちろん格技系のスポーツは道場を使う。水泳だったらプール。

もう一つは教室での体育の授業。体育同志会で体育理論の授業作り分科会というのがあって、その中で「教室での体育」ということをスローガンに掲げてやったときに、ある大会である女の先生で「雨の日、外でできないとき教室でレクリエーションみたいなことをやる、そういうことを教えてくれる分科会だと思った」と言う人がいましたけれども、全然ちがいます。文化的認識を形成する（教える）授業のことです。これをそれぞれ二つずつに分けて合計四つに分けることができる。

まず第一に、グラウンド、体育館、プール、道場等で行う授業のAのタイプ。これは「できる」（技能習熟）を中心とする時間で各種スポーツの基礎的技能の獲得を目指す。みんながうまくなることを実現する。これはこれまで体育同志会が中心になってやってきました。従来の体育のイメージはこのAのところでした。

Bのところは、グラウンド、体育館で行うんだけど「分かる」（技術的認識）を中心とする時間。スポーツの技術学を学ぶ。技術学の中には戦略とか戦術についての科学をもちろん含みます。力学的な法則であるとか技術についてということだけじゃなく、その原理とか法則を学ぶ。授業のスタイルは実験、実習風の授業として展開される。例えば、短距離走で50m刻みのラップタイムを取ってスピード曲線を描いて、それぞれの子供の走り方はどんなスピードの変化になっているのか、スピードが落ちるときには足跡はどんなふうに乱れるか、というのは直接、短距離走の記録を縮めることを目的とするのではなく、つまりAのタイプの授業ではなくて、グラウンドでやるけども短距離走の科学を教える授業なわけです。速く走るにはどんな原理、原則があるかを探る。「田植えライン」とかを使います。

もちろん授業自体はAとBのミックスということも当然ありうる。完全に分離しているわけではありません。現実にはミックスされて展開されるけども性格としてはそういうふうに分けます。球技で、だれからだれへパスを渡したとか、だれがシュートした「心電図」を書くということがありますが、それは、作戦とか戦略とか分析ですから、技術学の分析と総合を学んでいるわけですから、これは、リーグ戦をして試合をして、その間に記録をとってチームで分析する。その部分はBに属する授業です。

後残りの二つ。教室でやる体育のAというのは教材種目単元の中での一部の時間を教室でやる場合です。サッカーの授業なんだけどもその最初の時間はサッカーの歴史の話をみんなにしたり、サッカーの授業の最後のしめくりでまとめの授業を教室で行う。また、ゲームの記録の分析をグループごとに教室で行う。これも先程のグラウンド、体育館の授業のBと重なる部分がありますけども、単元の中の教室でやる時間となります。

第四のタイプは、教室でやるBは他の三つでできないような内容です。例えば、個別の直接系統的な技術学習と関わらない内容を教える。主としてスポーツの文化的な内容のもの、例えば小学校ではボールの授業とか棒の授業とかラインの授業。分かりにくいかもしれませんが、中学校高校では体育理論の領域。熊本でさかんに取り組まれているボールの授業を見ますと、ボールにはどんな種類があるか、そして種類を通して球技の形式を知る。敵味方入り乱れてやる球技もあるし、

ネットで仕切られた球技もある。スポーツの中でのボールのゲームにはどんな種類があるかということをお子たちに（これは、小学校の授業ですけども）スポーツの基礎的な科学・概念として教える。これはバスケットの時間でもサッカーの時間でもできませんから、特別にそのことを教える時間として設定をする。

前回、前々回でしたか、熊本の推進講座で、愛知の成瀬さんは、高校生を対象に「ゴルフボールの授業」というのを構想されて、実践をされました。これは、ゴルフボールの発展をずっと追っかけていって、最初水鳥の羽をつめていた時代から、今はディンプルというへこみができて飛ぶようになったというゴルフボールの変化発展史をお子たちに紹介しながら、それが、ゴルフ場を変え、ゴルフの技術を変えていった。これが教室でやる授業のBでした。

私たちが取り組むべき授業のタイプは基本的にはこの四つに分かれる。今圧倒的に多いのは最初のA、ほんの少しBもある。教室でやる体育のABというのは教材種目単元の中ではオリエンテーションとか最後のまとめとかに部分的には手をつけているけども、教室でやる体育のBの方はほとんど未開拓。やっと先行的な実践がいくつか出てきたぐらいです。ではその時間配分をどうするか？ここに私の体育実践の作り替えのイメージがわりと出てくると思います。小学校では、グラウンド、体育館でやる授業のA、つまり「できる」（技能習熟）を中心とする時間は全授業時間の60%ぐらい。だから小学校の体育の6割は技能習熟、みんながうまくなることに時間を割いている。次に「わかる」（技術学）初歩的な技術学、戦略・戦術の科学を教える、これが20%ぐらいで、教室でやる体育Aのところ、歴史であるとか、プールの出現が水泳を変えるとかこういう類いの文化的内容のことで、教材種目の中でやる。単元の一部としてやるのが10%。最後に教室でやる部分で独自の領域を持っているもの、ボールの授業に代表されるものが10%ぐらい。これが小学校の一応の時間配分と考えています。

小学校で「ボールの授業」みたいに教室でしかやれない授業、それは指導要領のどこにあるか。現状にはありませんがよく調べてもらおうと1958年に改訂された指導要領に、小学校にも体育に関する知識という領域がちゃんと設定されていて、そこでは競技会の仕方とか、もちろん体の仕組み運動の仕組みとか働きということもありますけども、大会の種類であるとか競技会の種類であるとかを教えるのが入っています。ところが次の改訂の68年にはそこはそっくり消えてしまいまし

た。58年の改訂だけありました。それは1958年までの戦後民主教育であるとか新体育の実践の蓄積、またその遺産が反映されていたのです。58年の指導要領というのは、法的拘束力が初めて出てきたとか問題のある指導要領なんです。体育の中身でいうと、戦後民主教育の成果が文化的内容を小学校高学年に教えなければならない、技能習熟だけではだめだという当時の教師たちの自覚がそこに反映されているんです。ところが残念ながらそれはほとんど実践されませんでした。だから、「ああこんなこと現場の先生に要求しても無理なんだなあ」ということで、68年の改訂ではそっくり消えた。一挙に消すのは問題があるから体育に関する知識を各教材のところにばらまく。サッカーの大会とか特性についてはサッカーの種目のところで話をしなさい。マット運動だったらマットの話をしなさい。ばらまいた結果全部消えました。もちろん中学高校の体育理論のところは改訂を繰り返すごとに社会科学的な内容、文化的な内容がどんどん減っていった。生理学的な内容、自然科学的な内容が増えていった。中身としては大変貧弱なものになった。文化的な内容が戦後の改訂でどんどん擦りへっていった。だから58改訂のときの指導要領にはこの部分があったということです。残念ながら教師の力量がそれに追い付かなかった。

中学校高校ではもう少しきつく変わります。グラウンド、体育館のできることをめざす時間が4割ぐらい。何故ならば中高ではよりいっそう教科外のスポーツ活動、つまり自ら自主的に取り組むスポーツ活動が授業の外でやられるべきだ。クラブ活動とか部活動とか様々な昼休みや放課後の活動を子供自ら学校の中で組織して教師が指導することが大事ですから、教科の中ではそのウエイトが減ります。技能習熟を目指す時間は4割程度です。分かるための技術認識、技術学を学ぶ時間は2割程度増えます。教室での体育はそれぞれ2割ずつ。ということで文化的な内容が増えてくるというイメージを私は描いています。ただしこれは実現できるかどうかは、指導要領を変えないと実現できないと言われればそうでしょうし、自主編成運動がもっと進まないと言われればそうでしょう。しかし、私たちの運動として取り組んでいく改革のイメージ、方向としてはそういうイメージがあってそれを目指して変えていくことが必要ではないか。一つのイメージスケッチというのを持って欲しいと思います。

7. 「教えたい中身研究」がまず必要

熊本からの要請はグループ学習を入れて欲しいということでしたが、私は意識的にそれは避けました。何故ならば教えるべき中身がはっきりしていない段階で授業をどう作るかという話にいきなり入ることは良くないと思っていますから、今は体育の教えるべき中身として技能習熟とか技術的認識だけでいいのだろうかという疑問点を大きくはりつけて、それに加えて文化的な認識みたいなことが重要ではないかということをつけ加えました。そうすると技術的な認識とか技能習熟については技術指導と集団作りという枠組みの中の私たちは十分にグループ学習を展開できます。ただ文化的な認識についてはどんなことをどういう順序で教えたらよいかということについては、ほとんど研究が進んでいない。まずそのことをしっかり研究することが重要ではないかと思うのです。

例えば水泳の技術だったら、感覚練習から始まり、ドル平をやって次に近代泳法に入っていくという細かなステップがあり、どんな子どももきっちりのぼっていけばどんな子どもも泳げるようになるという系統的な指導法が確立されています。技能習熟とか技術的認識については教えるべき中身が確立していますからそれをいかに有効に子どもたちに教えるか。子どもたちが自らそれを汲み取っていくか、一方的な教え込みではなくて系統そのものを教えるのではなくて、ついこの前までは、「系統を隠した指導」ということをいいました。子どもたちに系統を探らせる指導、探検型の指導、探究型の指導といいました。それは、教えるべき中身が教師側にはっきりあるからです。はっきりあるから、系統をそのまま子どもたちに体験させた注入型、教え込み型の指導から脱却して、系統を隠して子どもたちに次はどうだとか、ここはどうなっているのか、質問とか発問とかはさみこみながら、子どもがそれに食いついてきて、結果としてその系統にのっかっていく学習を組織することができました。

今は文化的な内容については教えるべき中身がはっきりしていませんから教師の側が文化研究なり教科内容研究なりを改めてしっかりやること。そういうことの成果を受けた最初の授業は一斉指導型、または注入型、お話し型に当面はならざるを得ないと思います。

フットボールというのはどんなふうに発展してきたかということをお話したら、それは先生のお話として一斉授業としてやらざるを得ない。文化的認識の

変化発展の道筋がはっきりしてくれば、一斉授業型から探検型、子供同士が正しい答えまちがった答えからめ合わせながら私たちが目指すべきグループ学習が初めて実現できると思っています。今のところ文化的な内容ではそういうところを辿っていないから私自身がしっかり勉強することが不可欠だと思っています。

しばらく時間がかかるかもしれませんが手がかりは私たちの周りに山ほどあって、ジャーナリストたちが注目しているスポーツ科学に関する本が最近立て続け山ほど出ています。それも体育とかスポーツ関係者が書いた本よりは他の分野の人が書いた本の方がとても興味深く分かりやすい。体育の人は技能習熟とか技術のところからどうしても抜け出せない。中村敏雄という有名な人はそこから抜け出ていますけども、あの人はものすごく性格的にひねくれていて、冷めているから抜け出ているのですね。競技者だった人は、なかなか抜け出れない。美術評論家が最近サッカーのことを書いていますけどもものすごくおもしろい。客観的な世界としてスポーツを見てる。美術の発展史とスポーツの発展史を並べることによってその違いが分かるから学問的な広さや深さが違う。そういう出版物まで出てきていますから勉強しようと思えばいくらでもできる。後は本人の心がけ次第。

熊本支部を中心とする九州の人達はまちがいなくできるはずですから、この前来たときには、3年間は根を上げないでがんばるということでしたが、3年間経って成果を挙げていただきましたから、阿蘇大会以後しっかりその成果を学んでほしい。私もいっしょにそれを学びたいと思います。